

入試年度	2026	入試方式	社会人（秋季）	課程	博士前期
研究科	文学	専攻	国文学	領域（分野）	
出題のねらい					
大問【一】 鴨長明『無名抄』から出題した。大学院博士前期課程で学ぶにあたって必要な古典文学史・和歌文学史の知識を持っていること、さらに、和歌ならびに説話の内容を正しく読解する力を持っていることを確認することを目的としている。					
解答・解答例または採点時の評価ポイント					
大問【一】 問一 1、金葉和歌集 2、俊恵 問二 （秋が終わる日の夜は）明けてしまったとしても、それでもやはり秋風が訪れて、野辺の風景よ、変わらないでおくれ。 問三 「明けぬとも」の歌の作者が俊頼であること。 問四 俊頼の和歌の第三句が「おとづれて」となっていることに対して、「「まったく和歌は、第三句の終わりに「て」の文字を置くとたいしたことがない。妨げとなって大変聞きづらいものだ」と批判した。 問五 貫之歌の第三句も「寒からで」と「で」を句の終わりに置いている。基俊は「和歌の第三句の終わりに「て」の文字を置くとたいしたことがない」と批判し、さらには琳賢が出そうとする証歌を「良い歌であるはずがない」と見得を切ったが、貫之歌は、『拾遺集』にも入集する有名な秀歌である。基俊は貫之歌に対して「たいしたことがない」と批判しているのも同然のことを言ったことに気づかせるため、さらには基俊に対する皮肉や嫌みをこめて、最後の「で」の字を長々と強調するように読み上げた。 問六 俊頼の歌に対して批判したのだが、貫之の秀歌に対する批判になってしまったこと、また琳賢の「ことやうなる証歌こそ一つ覚え侍れ」という言葉が、基俊を罫に掛けるものだったことを察知できず、まんまと「よもことよろしき歌にはあらじ」と答えてしまったことに気づき、恥ずかしさと屈辱を感じている。 問七 堀河百首					

入試年度	2026	入試方式	社会人（秋季）	課程	博士前期
研究科	文学	専攻	国文学	領域（分野）	
出題のねらい					
大問【二】 中世作品『方丈記』の近世初期写本を出題して、書誌学および文学史に関わる知識・理解がどの程度身に付いているかを試しつつ（問一・問四）、翻字の基礎的能力の有無を確認する（問二）とともに、本文を注意深くあるいは概括的に把握・読解する能力について試験した（問三）。					
解答・解答例または採点時の評価ポイント					
大問【二】 問一 装丁法の一つ。裏白の面が内側になるように料紙を中央で二つ折にして重ね、折り目とは反対側の端を糸などで綴じる方法。 問二 行水のなか（が）れはたえす（ず）して、しかももとの水にあらず（ず）。よと（ど）みにうかふ（ぶ）うたかたは、かつきえかつむすんて（で）、ひさしくとゝ（ゞ）まる事なし。世中にある人のすみかも、又かくのこ（ご）とし。もろくの里くにむねをならへ（べ）、いらかをあらそへる、たつときいやしき人の住居は、世ゝをへてもつきせぬものなれと（ど）も、むかしあるは今はなし。 問三 （１）「に」は衍字であるが、親本に見られる本文であるので、削除せずそのままに書写した、ということを示したものと考えられる。（２）娑婆にて善知識の教えを聞きながら信じることなく、ここに来たのなら、また、遙か昔から何度も再び来るなと諭したにもかかわらず、またもやここに来て苦を受けることになったのは、自業自得であり、愚かの極みである。 問四 江戸前期の俳人・歌人。松永貞徳に俳諧を学び、のちには歌学方として幕府に仕えもした。また、古典注釈に励み、『湖月抄』や『徒然草文段抄』などを生み出した。そして、その門から芭蕉らが輩出した。					

入試年度	2026	入試方式	社会人（秋季）	課程	博士前期
研究科	文学	専攻	国文学	領域（分野）	
出題のねらい					
大問【三】 問一 文献を読解するうえで、或いは論文の文章を執筆するうえで必要となる、基本的や語彙力や、文脈に即した適切な語彙を選択できる力を試す問題です。 問二・問三・問六 近・現代文学を専攻する人はもちろん、それ以外の分野の研究を志す方々にとっても広い視野を持つために必要な、基礎的な文学史の知識を問う問題です。 問四 文章の内容を正確に読み取り、読み取ったことをわかりやすく文章化する力を試す問題です。 問五・問七 文章の内容を正確に読み取ったうえで、そこから得た知見を応用して、さらに発展的に考察を展開し、自身の研究に活用する力があるかどうかを試しています。					
解答・解答例または採点時の評価ポイント					
大問【三】 問一① 功利 ② 甚大 ③ 警鐘 ④ 変貌 ⑤ 裾野 ⑥ 端緒 問二 新感覚 川端康成 雪国 問三 蠅・日輪・春は馬車に乗ってなど。 自然主義・リアリズムに対抗し、比喩表現や擬人法を多用し、映画の手法を小説に導入するなど、新しい表現方法を模索した。 問四 死に直面するような「稀有な災厄」の記憶を忘れることなく持続的に喚起し、「心に受けた恐怖」と向き合い続けることで、新たな言語表現を模索し続ける姿勢を獲得した、ということ。 問五 問題文の第二段落では、田山花袋による関東大震災の見聞録、『東京震災記』で述べられている内容について言及されています。こうした作家の体験記を研究で扱う場合、どのようなことに注意する必要があるでしょうか。今回の問題文の中で述べられていることを参考に、次の枠内に収まるように自分の意見を記しなさい。 問六 三四郎 問七 作品の舞台となる都市の様相が、作家が生み出す表現にどのような影響を及ぼすかを考えるために、文学の舞台となる都市は、社会の状況の変化によって姿を変えてゆくものであることを意識しておくことが望ましい。					

入試年度	2026	入試方式	社会人（秋季）	課程	博士前期
研究科	文学	専攻	国文学	領域（分野）	
出題のねらい					
大問【四】 中世作品『方丈記』の近世初期写本を出題して、書誌学および文学史に関わる知識・理解がどの程度身に付いているかを試しつつ（問一・問四）、翻字の基礎的能力の有無を確認する（問二）とともに、本文を注意深くあるいは概括的に把握・読解する能力について試験した（問三）。					
解答・解答例または採点時の評価ポイント					
大問【四】 問一 装丁法の一つ。裏白の面が内側になるように料紙を中央で二つ折にして重ね、折り目とは反対側の端を糸などで綴じる方法。 問二 行水のなか（が）れはたえす（ず）して、しかももとの水にあらず（ず）。よと（ど）みにうかふ（ぶ）うたかたは、かつきえかつむすんて（で）、ひさしくとゝ（ゞ）まる事なし。世中にある人のすみかも、又かくのこ（ご）とし。もろくの里くにむねをならへ（べ）、いらかをあらそへる、たつときいやしき人の住居は、世ゝをへてもつきせぬものなれと（ど）も、むかしあるは今はなし。 問三 （１）「に」は衍字であるが、親本に見られる本文であるので、削除せずそのままに書写した、ということを示したものと考えられる。（２）娑婆にて善知識の教えを聞きながら信じることなく、ここに来たのなら、また、遙か昔から何度も再び来るなと諭したにもかかわらず、またもやここに来て苦を受けることになったのは、自業自得であり、愚かの極みである。 問四 江戸前期の俳人・歌人。松永貞徳に俳諧を学び、のちには歌学方として幕府に仕えもした。また、古典注釈に励み、『湖月抄』や『徒然草文段抄』などを生み出した。そして、その門から芭蕉らが輩出した。					

入試年度	2026	入試方式	社会人（秋季）	課程	博士前期
研究科	文学	専攻	国文学	領域（分野）	
出題のねらい					
大問【五】 大学院において漢文学に限らず国語国文学の研究を進めるにあたって、最低限必要となる漢文に関する基礎知識（語彙、漢詩、文学史、古典常識）や基本的な能力（訓読など）、さらには読解力などを見るための問題を出した。					
解答・解答例または採点時の評価ポイント					
大問【五】 問一 ①右中弁と八省に赴く②華清の春色に異ならず③宛も姑蘇の秋心のごとし 問二 心思有りと雖（ど）も、眼看に如かず 問三 豊楽院、其処、此 問四 呉音。上代に百済（朝鮮半島）経由で日本に入ってきた南中国（長江流域）の漢字の発音で、大勢が漢音に移った後も（桓武天皇が、遣唐使らが伝えた洛陽・長安の発音である漢音を奨励した後も）、仏教語や律令語に残った。「文殊菩薩」「文章博士」の「文（もん）」も、その一例である。 問五 (1)歲月久 (2)君の来たるは一身の為（なり）、君の来たらざるは万人の為（なり）。(3)盛唐の玄宗皇帝 問六(1) ・全体が偶数句とは限らず、奇数句もある。この詩は全二十五句。 ・七言古詩だが、七言以外も混じる。第三句・第五句は五音。 ・換韻がある。第一句「宮」、第二句「重」から、第三句「日」、第四句「溢」の入声に換わる。 問六(1) 江戸時代初期（元和四年）に、儒学者の那波道円（活所）が刊行した木活字本。 ・『文集』の原態に近い「前後続集本」（「先詩後筆本」に対す）の伝本。北宋刊本以来の全七十一巻。 ・ほとんどの注釈書の底本になっており、中国にも逆輸入され、『四部叢刊』の影印に用いられた。 ・但し自注の削除などもあるので、先詩後筆本の紹興本や、金沢文庫本等の写本も参照すべきである。など (2) ・巻三及び巻四は、古体詩の諷諭詩の中でも、特に代表的な「新樂府」五十首を収める。 ・「海漫漫」「五弦弾」「売炭翁」「澗底松」「牡丹芳」などの社会風刺全般のほか、「上陽白髮人」「太行路」「繚綾」「李夫人」「陵園妾」「古冢狐」など、女性の姿や悲哀を描いたものも少なくない。 ・国文学で諷諭の主題をそのまま継承したものは、漢学者や『源氏物語』など一部に限られる。 ・表現自体が非常によく練られ印象的なので、一般的には、主題とは切り離され部分的な受容（断章取義）がなされた。当該記事、「驪宮高」の人民の負担に配慮して行幸を控える君主を称賛するという文脈から切り離されて、「牆有衣兮瓦有松」を無常の表現として用いたものである。 ・散文や会話での引用以外にも、例えば「夜の鶴子を思ひて籠中に鳴く」（五弦弾）、「蕭蕭たる暗雨窓打つ声」（上陽白髮人）など、歌ことばにもなった。「人木石に非ざれば皆情け有り」（李夫人）などは、中世になると出典を意識せず慣用句として用いられた。 ・「神田本」は、十二世紀初頭に書写された巻三・四のみの写本で、最古の訓点（天永点）も付されている。など (3) ・白居易は中唐の詩人。字楽天。官人としての最初は都の近くの県尉、その後中央の諫官を務めたが、母の死で三年間服喪。復帰後間もなく江州司馬に左遷された。忠州刺史を経て都に戻った後、地方官を望んで江南に赴く。さらに洛陽や長安で務め、晩年は分司東都として洛陽で自適の生活を送った。 ・古体詩を自ら三分類したうち、諷諭詩と閑適詩は『孟子』の「兼濟独善」の思想に基づくもので作者の要視するものだったが、日本では特に三つ目の感傷詩の「長恨歌」「琵琶行」などの人気が高い。 ・詩の歴史では、散文の用語や理屈を詩に導入した変革者で、中唐詩以降の詩の散文化を促した。 ・詩文集『白氏文集』は、平安時代の初期、留学僧惠萼などにより、白居易の生前に将来された。 ・『千載佳句』の摘句の作者の多く、『和漢朗詠集』の邦人以外の作者の大半は、白居易である。菅原道真他の平安前期の詩人をはじめ、日本漢詩文の用語・発想・価値観などに大きな影響を与えた。 ・また、大江千里『句題和歌』以下の和歌、『伊勢物語』以下の仮名散文も、白居易や親友元稹・劉禹錫の詩文を踏まえている。特に『和漢朗詠集』を通じて、中世の和歌、軍記物語、謡曲、歌謡などにも影響が及んだ。仏教と文学などの芸能との関係に対する認識「狂言綺語観」も、その一例である。など					